



西九州大学
社会福祉学科 准教授
橋本 みきえ

私とダルク

西九州大学で教員をしている橋本みきえです。常套句ですが、暑いですね。私は今でこそ教員ですが、1999年度まで、精神科の病院でソーシャルワーカーをしていました。精神科ソーシャルワーカーが精神保健福祉士という国家資格になった時期に、縁あって、神埼の西九州大学に勤務することになり、大学では精神保健福祉士を目指す学生の指導をしています。



私は「ダルク」という言葉を聞いたときに思い出す人が2人います。かいつまんで紹介しますと、次の2人です。1人目は、男性で20代の患者さんでした。当時、私が勤めていた病院に、アルコール依存の問題があるということで、生活保護のケースワーカーさんに伴われて受診されたのが出会いでした。入院後、実は薬物依存の問題もあり、さらに2人暮しの父親にもアルコールの問題があることが分かりました。入院中はおとなしくて、従順で、優しくて何ともかわいらしい方なのですが、退院すると数日でスリップしてしまう人でもありました。スリップすると人が変わり、暴言、暴行（人にではなく物を壊すなど）、叫び声を挙げ、近隣の住民を怖がらせていました。何度も再入院を繰り返し、退院のたびに同様のトラブルを起こしてしまう「困ったちゃん」でした。

もう1人は、大学時代に某ダルクにボランティアでかかわりを持っていたという後輩のソーシャルワーカーです。ダルクでの活動を評価して採用した後輩でした。この後輩は私の書類の片づけ方があまりにも無精であったためか、私のデスクを片っ端から片づけることを日課にするような几帳面な女性です。表情がいつも堅いのが気にはなっていましたが、依頼した仕事は見事にやり遂げる人でした。ある日、遠方のダルクの利用者がスリップして、私たちの病院に入院することが決まると、とたんに冷静でなくなり、まるで自分の子どもが入院するかのように付き添い、身の回り品を整え、叱ったり、泣いたりといった状況を見せる「イネイブラーちゃん」に変身してしまいました。「イネイブラーちゃん」は、ダルクメンバーの入院によって、ダルクでの活動を評価されて就職してきた自分の評価が大きく下がるという不安から、何としてでも自分で回復させなきゃといったプレッシャーを自分でかけていたようでした。

「困ったちゃん」は数回の入院後に、ようやく父親とは別居して、自分の道を探すことを決め、私がお手伝いをするようになりました。アパート探しや、断酒、断薬の工夫、ゆくゆくは仕事も・・・などと不安ながらも、少しずつ前進しているような姿をうれしく思っていました。

でも、でも、実は私自身が「イネイブラーちゃん」と同じような感覚に陥っていったのです。「困ったちゃん」が何か起こすたびに「イネイブラーちゃん」と同じように、彼を叱ったり、世話したり。九州ダルクが産声を上げるかどうかの時期でした。ダルクにつなげることも、NAに導くこともせず、「イネイブラーちゃん」のことは客観的に注意できるのに、自分のことは見えていない、ダメな

ソーシャルワーカーでした。

ある日、「困ったちゃん」から「あなたは僕のお母さんみたいだ」と言われた時、初めて自分の愚かさに気づいた次第です。

その後、私は今の職場に来たため、「困ったちゃん」に会う機会はなくなりました。しかし、風のうわさで、ダルクにかかわるようになって、病院などにメッセージを届けに行く活動をしているらしいと聞きました。私のあとを引き継いだソーシャルワーカーがきっと、そこにつなげてくれたのだと思っています。「困ったちゃん」はもう「困ったちゃん」ではありません。そもそも「困ったちゃん」と名付けてしまうほど、私はイネイブラーだったのでしょ。反省しています。もっと早く、自助活動につなげていたらと思うと、悔しくもあります。

「イネイブラーちゃん」も、その後転職したと聞いています。でもきっと、ダルクへのかかわりは続けてくれていると思っています。

そして、佐賀ダルクの誕生。時は流れるだけでなく、確実に実を結ぶものですね。私自身、ダルクを活用できなかったソーシャルワークの反省を生かして、これからの支援には欠かせないダルク存在にかかわり続けたいと思います。

薬物依存症の M

皆さん、こんにちは薬物依存症の M です。今回は僕が薬を使い始めた頃の事を書きたいと思います。僕が使ってきた薬物は、シンナー、処方薬、大麻、覚せい剤、ガス、アルコールです。

僕は中学1年生の頃に家出をきっかけにシンナーを使い始めました、中学2年頃には暴走族に入り、ヤクザの組事務所に入出入りしていて、毎日シンナーと処方薬と一緒に使っていました。警察に何度も捕まったりしたけどシンナーを止める気持ちなんて全然起こらなく使い続けていました。そんな生活を続けていましたが、18歳になる少し前に東京に行って仕事を始めました。東京に行ってからシンナーと処方薬は止まっていたんですが、晩酌をするようになりました。

19歳になった頃、仕事が終わってビールを飲んでいてつまみが無くなったので、コンビニへ出かけました、途中工事現場がありそこにシンナーと書いてあるポリ缶があったので、ふたを開け匂いをかいで、そのポリ缶を盗みました。盗んだポリ缶を持ってつまみを買に行くはずだったコンビニにシンナーを吸うためのビニール袋を買いに行っていました。

そして歩きながらシンナーを吸い始めました、気がつくとも朝方で警察に捕まっていた。警察に捕まり鑑別所に送られ、その後保護観察処分となりました。

そんな事がありながらも東京での仕事は4年程続いたのですが、仕事が嫌になり、仕事を止めて、同棲していた彼女とも別れ地元に戻りました。

地元に戻ると、周りの友達はまだシンナーを使っていて、それに流されるようにせっかく止めていたシンナーと処方薬にまた手を出して使い始めてしまい、また元の生活に逆戻りしました。

時が経つにつれ、周りの友達はシンナーを止めていくのだけど、僕だけは止められずにいて、自分の好き放題な生活をしていました。

シンナーと処方薬を使い単車で大事故を起こしたり、自殺未遂をしたこともあります、そのうち病院に入院するようになり、23歳の頃に薬物依存症と診断されました。

シンナーを止めようとは思うようにはなりませんが、アルコールと処方薬を使うようになり、酔ってくるとシンナーが欲しくなりシンナーに手を出していました。

入退院も繰り返すようになり、今日一日どうやって薬を使おうかと、薬物を止められない生活を送っていました。

次号へ続く…ただいま執筆中です

薬物依存症のまこちゃん

みなさん、こんにちは薬物依存症のまこです。先日7月5、6、7日の日程で京都パルスプラザにおいてNAジャパンリージョナルコンベンションが開催されました。

日本中のNAメンバーが集う交流会の様なものです。テーマは「変えていく勇気」でした。僕達も長崎のNAメンバーと朝方4時に高速のPAで合流して10人乗りのワゴン車で9時間かけて京都に乗り込みました。



人の集る所が極端に苦手な僕は、会場がどんな状態なのか想像もつかず、ちょっとした変化でころころ変わる不安定な精神状態で果たして三日間を耐えられるのか？宿はどんなところなのか？まさかみんなで雑魚寝なのでは？などと細かいところまでいちいち心配して不安で一杯でした。

さすが京都、着いて会場に降り立った瞬間、身にまとわりつく熱気に閉口してしまいあちこちに群がる様にして談笑している人達を見て早くも恐怖を覚え、先を歩く仲間の足元に視線を落としてまるで処刑台に連れ出される囚人の気分とでも言ったらいいのかとぼとぼと会場に入りました。

車から降りる前に「楽しんで」と言われていた仲間の言葉を思い出す余裕も幾らか残ってた僕は、仲間に溶け込もうと初めて会う仲間に自分から声をかけたりしていたのですが、まだまだ自分の為に楽しんでいるって感覚にはなれずに夕方ごろには疲れも重なりクタクタになってしまいました。

そして休憩中、煙草を吸っている時、知らない仲間に囲まれて不安と緊張で精神的に一杯一杯の僕は人ごみと喧騒の中自分の居場所を無くしうつむいて顔さえ上げれずに、完全に自分自身に負けたという敗北感に打ちひしがれ、ただこの場所から逃げ出たくて仲間の目をかいくぐる様にして会場から抜け出しタクシーに飛び乗りました。

この時、初めて薬を使いたいって欲求が入り地元に戻ろうと決めたのですが、財布の中には小銭だけ…取り敢えず京都駅まで辿り着きましたが、その後どうしようもなくして鉄道警察隊の詰め所で、地元の友達に福岡までの新幹線の切符を買ってもらうため電話をかけさせてもらいました。友人の返事は「いいけど…でも戻ったほうがいいよ」でした。

僕はその友人の言葉に後押しされるように仲間の元に戻る決心をしたのですが、電話を借りる際僕の名前を聞かれていて、以前僕が5月にダルクに繋がる前に絡んでいた件で警察の方で詳しい事情が聞きたいと通達が出ていたらしく、僕はそのまま京都府警に連れて行かれました。その件はすぐに過失だとわかってもらえたのですが、ただ僕には覚せい剤の前科があるので担当部署の刑事が取調室に入ってくるなり「オラッ！小便出せ」任意と言う名の強制の下、尿検査をされました。

もちろん使っていませんから反応はありませんでしたが、その時刑事が吐いた悪意に満ちた偏見の言葉にはとても傷つきました。

それから仲間の方へ連絡が行き迎えに来てくれました、僕はなんて言われるんだろう、どう説明しようか…と頭を抱え込んでいたのですが、仲間は顔を合わすなり思い切り笑い飛ばしてくれて。ほんとに何も言わずに息が止まるくらい強くハグしてくれました。

この時僕は薬を使わずに良かった、もっと薬抜き的人生を楽しみたいと強く思いながら段々と心が澄み渡っていくのを感じたものです。ここにいればこんなダメダメな自分にもそれが出来るんじゃないかって信じてることが出来たからです。翌日は僕の誕生日でサプライズで仲間に祝ってもらったり京都観光したり、宿も京都の町家風情の漂う素敵なお宿でした。

いろいろあった三日間でしたが精神的に不安定な状態の中、まだまだ仲間がしてくれた事やその思いに気づかない面もたくさんあるはずなので感謝の気持ちだけは忘れずにいたいと思います。

佐賀 DARC 代表 松尾 周

暑い日が続いていますね、毎日寝苦しい夜に扇風機だけはなんとか購入しましたが、佐賀 DARC の毎週一度行うハウスミーティングでは経費節約の為に7月に入ってから入寮者の仲間達が施設が苦しいだろうと配慮してくれ「節電、節水」と目標をたててくれています。

それでもミーティングの時間だけは、集中してプログラムができるようにとエアコンをつけたり消したり…そんな中でも、やはり夏を満喫、とにかく佐賀 DARC のモットーは楽しむことと。第一弾は、滝へ。青々とした緑を見て、マイナスイオンに癒され、大地のエネルギーでも感じて喜んでいただければと思いつつですが…

綺麗な自然の中を、ちょっとがらの悪い雰囲気仲間達が、ちょっと先行く仲間を先頭に歩いていく姿に「おお回復のプログラムだなあ」と後ろから感心しつつ滝を目指します。



滝についてみると、案の定「水が冷たすぎる、滝の勢が強すぎる」となんだかんだと、水に入らない言い訳をつける仲間もいたりする中、お構いなしに真っ先に滝つぼに飛び込み滝に打たれますが、修行ではありません。

楽しむことも、仲間が楽しんでいるのを見ると自分も楽しみたいと思える。嫌がっていた仲間も滝の勢いにひっくり返ったりする仲間を見て、自然と笑いにあふれている。冷たい水が心地よく感じ帰りには行きかう人達と自然に挨拶を交わすようになり「気持ち

よかったあ」と言葉が出る、良いプログラムの時間でした。

第2弾は、夏は海でしょと有明海ではなく車で一時間半ほどかけ唐津へと。少年にもどり、水中眼鏡に足ひれまでつけてモリをもち魚を追う仲間、海水パンツを濡らしただけで泳ぎましたよと海に入らず寝ている仲間、怖いながらも泳ぎの練習をする仲間と楽しみ方も様々です。

潜っている私を、釣り針で釣ってくれた仲間もいました。ひとしきり、泳いだ後は仲間全員で釣りへ、小学4年生以来の釣りだという仲間もいる中、入れ食い状態でアジが釣れバケツの中には数えてみると100匹ちょうどの成果。

丸一日を、海で過ごしました。ダルクに帰って、アジは仲間が南蛮漬けしてくれ食卓に登場しています、自分達で釣った魚を仲間で料理するととにかく旨いものです。



これだけを見ると、ダルクは遊んでばかりで何をやってるんだとお叱りを受けそうですが、楽しむことは最高のプログラムだと思っています。辿り着いたばかりの仲間は楽しむことすら出来ません。頭の中では先への不安や現状の不満、喪失感で楽しみどころではありません。

私自身、最初に受けた提案は「もっと楽しんだ方がいいよ」でした、「楽しめるわけが無い」と腹が



立ったのを覚えています。
薬を使いさんざん周りを傷つけたのだから、楽しんじゃいけないんだとすら思い楽しんでいる仲間ですら腹をたてましたが、仲間と過ごすうちに自然と笑いがこぼれ楽しめるようになり、楽しんで生きたいと正気を取り戻し。薬を使ってこの楽しい時間を無くしたくないとクリーンが大事になり。社会に出てからも苦しみばかりに包まれているように感じたときも、あの時あんなに楽しめたんだからとやり直す力を入寮中に仲間達と行ったキャンプや海の経験からもらいました。

我慢だけでは薬は止まりません、6ヶ月くらいダルクで過ごした辺りから色彩が変わったような感覚、世の中すてたもんじゃないな、楽しいかもと何かが変わったのは仲間との楽しい時間のおかげだと思います。

佐賀ダルクへ辿り着いたばかりの頃、夜になると「死にたくなる」と言っていた仲間が「最近生きたい」と言ってくれるようになった事や、いつも一番おとなしい仲間が海では一番楽しんで魚をついてきた事なんか嬉しく、共に歩いてきて良かったと力を貰っています。

今週も仲間にはとにかく楽しんでくださいと提案しています。「今日だけ、薬物抜きを人生を味わおう」と、今日一日を味わうように大切に生きようとプログラムを実践しています。

釣った魚は仲間が、南蛮漬けにしてくれました。
料理している手順を別の仲間が覚えようと側で見えています。
楽しみも生き方も、仲間が次の仲間へ伝えてくれるのがダルクのやり方です。

次は野菜でも作れたらと妄想中です
自給自足できるようにダルクが出来たらいいなと妄想をしています。
使える畑がないものか？と

情報募集しております。

